

Heroldo de HEL

N-ro 86 septembro-novembro 2000

合併特大号

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO

ce HOŠIDA Acuŝi

Mijanomori 2-18-18, TOMAKOMAI

053-0844 JAPANIO

北海道エスペラント連盟

〒053-0844

苫小牧市宮の森2丁目18-18 星田 淳 方

[ENHAVO 目次]

Principo de ESP エスペラントの大義

YAMAMOTO Syoujirô 山本 昭二郎 2

La 64-a Esperanta Kongreso de Hokkajdo

第64回北海道エスペラント大会

Esperanta Festo: Diskuto pri la temo

エスペラント祭: パネルディスカッション

HOŠIDA Acuŝi 星田 淳 3~4

Ĝenerala Kunsido 総会決議事項

NAKANO Cuneaki 中野 常明 4~5

Novaj komitatanoj 2001 年人事 5

Salutaj mesaĝoj 祝辞 6~7

Delongaj revoj fariĝis la vivo

German DUDĈENKO 8~9

Dua oficiala lingvo en Japanio: por kio do?

日本の第2公用語: 何のために?

Sergei ANIKEEV 10~11

Kio estus "La dua oficiala lingvo" de Japanio?

日本の「第2公用語」とは何か?

HOŠIDA Acuŝi 星田 淳 12

La monto "Us-nupuri"

erupciis (ainlingvo)

アイヌ語対訳記事「有珠山の噴火」

JOKOJAMA Hirojuki 横山 裕之 13~17

Esperanto kaj indiĝenoj

先住民族とエスペラント

KIMURA Gorô 木村 護郎 18~19

Vojaĝo en Mongolio por budhismo

モンゴル訪問記

ŬATANABE Sindoo 渡辺 晋道 20~21

Kiuj kaj kioj vi estas - poetoj el

Ĥabarovsk? (2)

ハバロフスクの詩人たち (2)

Mihail E. KORĈIMARJOV 22~24

Revenis la ĉevalo al hejmloka ĉielo

ふるさとの空に帰った馬《再録》

verkis KOGURE Masao

tradukis ŬATANABE Sindoo

木暮 正夫作、渡辺 晋道訳 25~27

Libroservo de HEL 図書部より 17

Danke ricevitaj 受領郵便物

HOŠIDA Acuŝi 星田 淳 28~29

TTT-Paĝo de HEL

インターネットホームページ 29

Paŝoj de la retpoŝta gazeto de HEL

HEL 発のメールマガジン「国際共通語エスペラント」の歩み 30

Provizora raporto pri la komitato

HEL 委員会について仮報告

KABAYAMA Yûsuke 樺山 裕介 31

Novaĵetoj

お知らせ; ザメンホフ祭、 Rond 32

• El la redaktejo 編集室から

KABAYAMA Yûsuke 樺山 裕介 31

私は ESPERANTO は大義だと思っています。

大義だから、私利、私欲の物差しで計っては困ります。

大義といっても難しくない。

たとえば、地球温暖化で生態系が変わってきました。

いわゆる先進国（アメリカ、日本）のエネルギーの過剰消費で

永久凍土の筈の極冠のシベリアの温暖化が進み

マンモスの遺体が次々と発見されている。

巨大氷山が融けて海面が上昇 K.T.P.

これらを阻止するため私達が少しでも無駄を省くこと、これが大義です。

近頃は科学の発達が急激で地震でいうなら上下動が多くなりました。

横揺れはこわくないが、上下動は恐ろしいそうです。

これも馴れてしまうと平気になるかもしれません。

地震や噴火を防ぐことはできませんが、予知することは出来ます。

人間のおごりで危険地帯に家を建て、大雨の日に釣りに行き、

進学競争、学歴社会で人を差別化する。

これらは必ずはねかえってきます。

人間平等を貫く、これが大義です。

今まで会ったことのない人と人が判りあえる、

というエスペラントは簡単安価な計算機みたいなものですね。

加減乗除は生活の基本です。それに読み書きも。

まずは世界中から文盲をなくする。

そのためには、私達にも善意の提供を求められていますが、

もっともっと積極的なものに・・・。

人と人が話し合いそして理解し合える。

このことが昨年の HEL のロシア訪問団によって立証されました。

今のロシア人はソビエト人ではない。

自由な、解放された、大地に立脚する人々です。

何事も上から命令され疑うことさえしなかった。

それが美德だと教えられていたのは、

かつての日本帝国の人民とおなじ。

これからは益々、人々は力強く自我をもつことでしょう。

エスペラントは自我を持ち自立する人々の役に立つことでしょう。

この年になって今更のようにザメンホフ博士の心を痛く感じます。

La 64-a Esperanta Kongreso de Hokkajdo
第 64 回北海道エスペラント大会

Esperanta Festo: Diskuto pri la temo
エスペラント祭：パネルディスカッション

HOŠIDA AcuSi
星田 淳

9月9日(土)のプログラムは午後 パネルディスカッション

「北海道・ロシア新時代を考える - 21世紀、心の国境はなくなるか? -」として市立小樽図書館視聴覚室で開かれました。

司会は樺山裕介さん。ロシア人来賓の一人ゲンナチー・シレプチェンコさんが一昨年の大会に来たウラジオストクのエスペラント・クラブ代表チャーエフさんのメッセージを代読。「エスペラント・クラブ・パツィフィーコ(太平洋)は今年で創立20年、ウラジオの最初のエスペラント会ができてから120年。2年後ウラジオで開かれるアジア太平洋学生会議のエスペラント部会には、また北海道からの参加を期待する――」との内容。ウラジオのクラブからの記念品が北海道エスペラント連盟の星田委員長に渡されました。

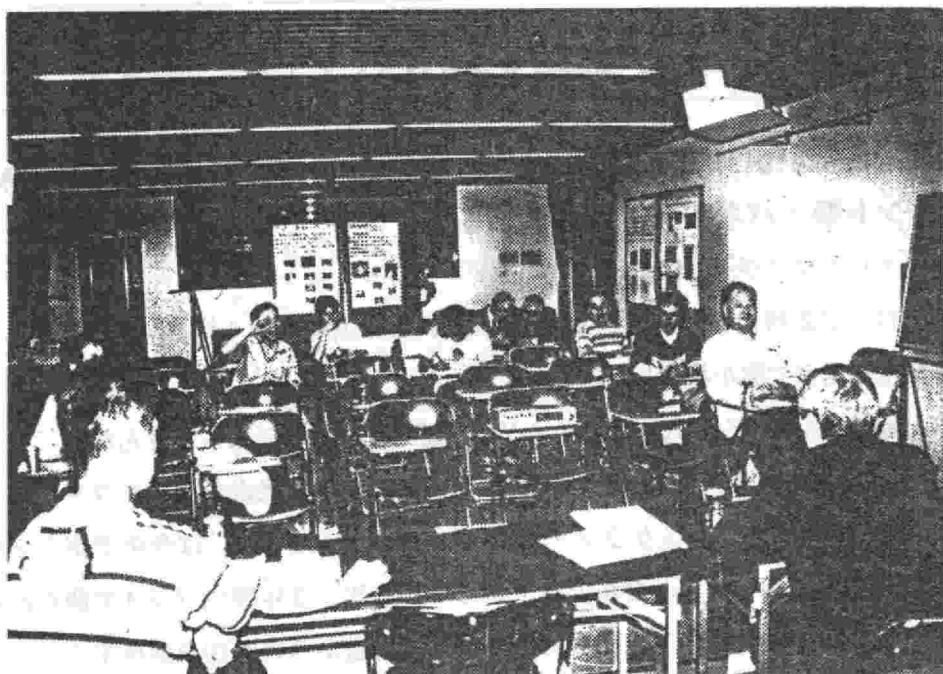
小樽の姉妹都市ナホトカの大学講師ミロスラヴァ・サブチェンコさんのあいさつに続いての発表はウラジオの極東歴史民族研究所のゲルマン・ドゥチェンコさん。内容は「漢字の分類・検索法についての提案」：ロシア人にとって難しい漢字の分類・検索を字の中の線・クロス・四角(ます)などの要素に着目して整理する、というもの。今使われているへん・つくり・画数によるものより便利だろうか？

最後のパネラーはヤマト人(Jamata japano)と称する松野元さん。サブテーマの「心の国境」と、小樽で問題になっている「外国人入浴拒否」に触れて、

「浴場でのエチケットが明示され、それに違反する人には注意し、時には退場してもらうのは当然だ。しかし違反するから、でなく外国人だから、と拒否するのは心の中に国境をもっていることを自覚していないからで、危険な考えだ」と主張。質疑応答の中でいろいろな意見が出ました。

(ゲルマン)「南北朝鮮、中国と台湾でも今後「国境」の意識は薄まっていくだろう。極東では民族を意識することも少なく、この点ヨーロッパロシアと違う。だが、先住民との結婚は少ない。これはアメリカでも同様だと聞いているが――」(先住民の人口が絶対的に少ない影響もあろう。だが、移住民同士の連帯感、それからはずれた先住民との間の「心の国境」の存在を感じさせる発言だった)

(ゲルマン)「腹一杯の人には飢えた人の気持ちはわからない。南北朝鮮の間にもそれがありそうだ。さっきの浴場問題、ロシアで聞いたことはなかった」



(日本側)「一部のロシア人船員について、浴槽で泳ぐ、酔って入浴する、なかでビール等を飲み騒ぐ、などの苦情が日本人客から出ていた。日本の公共浴場ではエチケットに反する行為である。ロシア人が来ているなら行かない、という客が増えたので、外国人拒否が出される原因になった。上陸したらその土地のルールにしたがってほしい」

(ゲルマン)「ソ連時代は船に共産党員の幹部が乗っていて船員を監視同行し、上陸して問題を起すものは船に連れ戻したり上陸を禁止したりした。だからあのころは問題は起こらなかった。あの制度を復活させれば直ちに問題は解決する――ま、冗談だが。今の我は自宅にほとんど風呂があり、公共の浴場に行くことは少なく、我々のところではこんな問題はない」

(あとで個人的な話では、ロシアの公共浴場ではビールなどを売っていて、それを買って持ち込んで飲むのは普通のことだ、という。やはり習慣の違いはある！)

ロシア報道機関は何を扱っているか、と聞くと、あれは政治家の道具だ、大統領以下政治家たちが何をした、誰に会った、の宣伝、チェチェン問題など、――という。極東にはウズベク人、カザフ人はいるがチェチェン人はほとんどいないし、知人もない――。なじみ薄く「心の国境」もできやすい状況のようだ。

「日本人はアメリカやヨーロッパには行きたがるが隣のロシア極東にはほとんど来てくれない。去年は宮沢さんのHELの一行が来てくれた。もっとロシアを訪問して我々を理解してほしい」とゲルマンさんは述べて、ディスカッションを終った。

第64回北海道エスペラント連盟総会決議事項

- (1) 日 時 : 2000-9-10 (日)
- (2) 場 所 : 小樽市港湾労働者福祉センター (3F 小会議室)
- (3) 出席者 : 本人出席 17名、委任状8名
- (4) 総会役員: 議長 権野正浩、副議長 鈴木佳子、書記 中野常明
- (5) 議案審議:

5-1) 議案書1、2000年度事業報告
特に問題なく承認される

5-2) 議案書2、2001年度方針
財政に関して、会計委員より以下のごとき懸念が示された。

イ) 資産取り崩しが、一般、事業会計の両方で、計150,000円となっている。今後このペースで取り崩しが続けば財政破綻の危険がある。

ロ) LKK特別補強費は、金額が大きく、事前説明も不十分であり一考を要する。

ハ) 寄付金、助成金に頼る財政は不安定であり対策が必要。

以上の点を、今後の予算作成に配慮することを条件に、承認される。

5-3) 議案書3、次回大会開催地
原案通り承認される。

5-4) 議案書4、北海道エスペラント後援会(仮称)
イ) 専従者をおいても、問題ないほどの寄付金は期待できない。

ロ) 別組織の会長を、連盟総会で解任できるのはおかし。

ハ) 従来通り、事務局内で処理すべきだ。

上記の意見があり否決される。

以上

大会書記

中野常明

2001年度人事

委員長 星田淳

副委員長 阿部映子

後藤義治

会計 松野元

事務局長・国際部長・図書副部長

佐藤英治

事務局次長・国際副部長・図書部長

宮沢直人

研究教育部長・機関誌副部長

中野常明

研究教育部員・機関誌部長

樺山裕介

広報部長・アイヌ語担当

横山裕之

メールマガジン担当・旭川

天方良彦

委員

岩井正久(道南)

大山口誠(苫小牧)

須藤昭三(室蘭)

浜田国貞(岩見沢)

前田幸一(小樽)

会計監査

馬場恵美子

権野正浩

Saluto de la sekretariestro de JEI (retpoŝte)
 日本エスペラント学会理事長・柴山純一氏からの祝辞

la Prezidanto de la Estraro de Japana Esperanto-Instituto (JEI),
 Al la 64a Kongreso, esprimas saluton, SIBAYAMA Zyun'iti,
 kaj petas pardonon ke nur mesag[^]e mi transdonas saluton.

Via kongreso havas paralelon, enlande kun la Kongreso en
 Tohoku, sed ne nur tio: Preskau[^] same norde, de la 8a g[^]is
 la 10a de septembro okazas la 51a Kongreso de Bulgara
 Esperanto-Asocio. Tial vi vidas, ke vi ne estas solaj
 sed vi havas amikojn-kamaradojn en la tuta mondo.

Mi au[^]dis, ke vi pritraktos la interligon inter Rusio kaj
 Hokkaido. Nu, mi atentigas, ke baldau[^] en 2002, oni havos
 centjaran jubileon de vizito de HUTABATEI Simei al
 Rusio, de kio rezultis la unua lernolibro de Esperanto,
 post pluraj jaroj. Tiel Rusio, precipe la Primos[^]tena
 au[^] Apudmara regiono havas fundan rilaton al la
 japana esperantujo. El tiu vidpunkto, mi des pli atendas
 vian engag[^]ig[^]on kun tiu najbara lando.

Esperante pluan disvolvodon de Esperanto en Hokkajdo, mi finas
 mian saluton.

ncc01734@nifty.ne.jp SIBAYAMA Zyun'iti

2000年11月17日(金) (16日発行)

フロンティアタイムス

第3 種郵便物認可

国際交流

どさんこ国際交流ネットワーク

「心の国境」の存在を感じた
 北海道事務局員 鈴木 佳子

とができました。大会の中でも「北海道・ロシア新時代を考へて」をテーマに九月六から五日間、札幌と小樽の両市を舞台にさまざまなイベントを繰り広げました。

六日八日は入門講座、九日はエスペラント祭り、最終日の十日は総会を開きました。

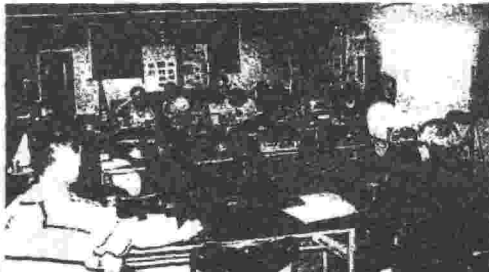
大会には、今年で創立二十周年を迎えたロシア人、松野元さんなど四

「心の国境」の存在を感じた
 北海道事務局員 鈴木 佳子

ができました。大会の中でも「北海道・ロシア新時代を考へて」をテーマに九月六から五日間、札幌と小樽の両市を舞台にさまざまなイベントを繰り広げました。

六日八日は入門講座、九日はエスペラント祭り、最終日の十日は総会を開きました。

大会には、今年で創立二十周年を迎えたロシア人、松野元さんなど四



5日間にかけて繰り広げられた「第64回北海道エスペラント大会」

オオサンパッチ

私の活動報告

第64回北海道エスペラント大会が二「エスペラント・クラシック」の開催は、フ・パツィファイコ(チャターエフ代表)のメンパー三人を迎え、素晴らしい交流を図ることができた。

樽の大浴場がマナーの悪いロシア人の入店を拒んでいる問題について、「浴場でのエチケットが明示され、その改善の進捗を説明しました。」

一方、ゲルマンさんは「南北朝鮮や中国と自国の国境問題に対する意識は今後高まっていくだろう」と時代の変化で極東では、民族間に友好の意識が芽生え始めるとし、欧州やロシアとの異なる感覚に挙げた「花嫁族との結婚は少ない」と指摘。

最後に「日本人は米国や欧州には行きたがるが、極東ロシアにはほとんど行きたくない。もっとロシアを訪れ、我々を理解してほしい」と呼びかけました。

先住民との結婚が少ないことについては、先住の人口が全体的に少ない影響もあるのではないか、移民住民同士の連帯感、それらがもたらした先住民との間の「心の国境」の存在を感じさせる発言に感銘、自分の中に「心の問題」について考える良いきっかけとなりました。

パネラーは、極東の歴史や「知らなかつた」とい、「今では心で必要の自宅に風呂が備えられ、ロシアで生活する問題は少ないと主張しました。

ゲルマンさんは、この問題を「知らなかつた」とい、「今では心で必要の自宅に風呂が備えられ、ロシアで生活する問題は少ないと主張しました。



札幌・ポルト姉妹都市提携を記念した「第三回 JICA 海外研修員と市民が市内の

海外研修員と市民 最高 環

Mesag^o de la prezidanto de <Pacifiko> al EKH
エスペラント団体 Pacifiko 代表から道大会への祝辞

Aleksandr TITAJEV

Karaj japanaj gesamideanoj!

Karaj geamikoj!

Je la nomo de For-Orientaj kaj Vladivostokaj esperantistoj mi salutas vin, partoprenantoj de la sesdek kvara Hokkajda Kongreso de Esperanto.

Dank'al via subteno la For-Orientaj esperantistoj denove vizitas Japanion kaj partoprenas la Esperanto-Kongreson.

Antau~ du jaroj nia delegacio konsistas el du personoj, kaj c[^]i-foje la grupo de vizitantoj pli multig[^]is je unu samideano, reprezidantino el Nahodko - Miroslava Savc[^]enko.

Dume en Nahodko la Esperanto-klubo ne ekzistas, sed, vers[^]ajne, venontfoje g[^]i estos fondita, des pli ke Nahodko estas g[^]emelurbo de japana urbo Otaru, kie okazas la nuna Esperanto-Kongreso.

C[^]i-jare en oktobro okazos la dudek-jarig^o de Vladivostoka Esperanto-klubo <<Pacifiko>> kaj novembre - dek-jarig^o de la fondig^o de la asocio de For-Orientaj Rusiaj esperantistoj, Kvankam la historio de Esperanto-movado kalkulas c[^]irkau~ centdek jarojn. Nun la Asocio konsistas el esperantistoj kiuj log[^]as sur la granda teritorio de la lago Bajkalo g[^]is Pacifiko.

Via regiono Hokkajdo estas plej proksima japana regiono al Fora Oriento. Niaj Asocioj ambau~ interesig[^]as pri plimultigo de Esperantistoj en la respektivaj regionoj.

Lau~ mia opinio, unu el tiuj vojoj estas propagando kaj instruado de Esperanto en diversnivelaj lernejoj ekde la elementaj g[^]is superaj, kaj organizo c[^]e ili de diversaj Esperanto-rondoj, arang^o de Esperanto-kongresoj, turistaj vojug^ooj k.t.p.

Interalie, venontjare en la komenco de oktobro denove okazos la studenta kongreso de azi-Pacifikaj landoj en kadre de kiu funkcios la sekcio << Esperantologio kaj interlingvistiko >> kaj ni atendas vian partoprenon sendepende de via ag^o.

Ju pli multe da junaj esperantistoj aperos en niaj regionoj, des pli forta estos nia movado.

La estonto de niaj lingvo kaj movado dependos de ni mem.

Sukcesojn kaj felic^on al vi, karaj samideanoj!

Sincere

Aleksandr Titajev, prezidanto de E-klubo << Pacifiko >>.

道大会に参加したゲルマンさんからの便りです。

Cxi tiu titolo plej gxuste esprimas mian personan sentadon dum la vojaĝo de nia delegacio. Versxajne, cxiuj niaj japanaj gekunuloj memoras nin. En Septembro de 2000 jaro ni logxis en la bona insulo Hokkajdo. De tiam la vortoj Sapporo, Otaru, Tomakomai kaj Hakodate por mi ne estas nur geografiaj nomoj de la japana lingvo. Ili farigxis grandaj impresoj kaj streboj.

"En guto de akvo spegulas la mondo" - diras unu proverbo. Por ni, rusiaj for-orientanoj, tiu eble estas de Japana maro. Kiu el ni ne memoras propran infanecon? Tiam la bela vorto "Japanio" nepre asociigxis kun fabelo. Cxiu el ni revis propraokule ekvidi tiun landon. Ankaux mi revis. Sed tiuspecaj revadoj ne estis realeblaj. Mi nur kredis, ke kiam mi estos plenagxa, mi povos viziti Japanion. Miaj amikoj mokis pri tio. Sed pasis jaroj, venis 2000 jaro, dum mia infaneco same fora jaro, kiel Japanio. Kaj kiam mi pretigxis por la vojaĝo, mi ofte ripetis al si: "Tio ne estas songxo! Ne songxo, sed urgxa laboro!"

Mi rapide al kutimigxis en Japanio al cxio. Iutempe gxis nun al mi sxajnas, ke morgaux vespere mi venos en la Rondetagxon kaj ekvidos treege konataj personoj - HELanoj kaj neHELanaj geamikoj de s-ro Mijadzauxa. Ni pri io interparolos. Kaj post morgaux mi venos de la distrikto Asabu en la Hokkajdan Universitaton laux la Kvara Okcidenta strato en Sapporo. Oni povas diri, ke mi konas jam preskaux cxiujn objektojn de tiu vojo tien kaj reen.

Kiel en akvo de guto spegulas la tuta mondo, samtiel mia vivo spegulas en tiuj dekok tagoj de nia logxado en Japanio. Ion mi bone sukcesis, ion ne, ion ankoraux ne. Do, en Esperantaj aferoj mi sukcesis: partopreni en la 64a Kongreso de HEL, gvidi la kursojn por komencantoj, prezenti nian novan gazeton "La Pacifika Kuriero", prezenti novan grafikan sistemon por ideografiaj vortaroj, konatigxi kun multaj geesperantistoj, proponi kelkajn materialojn por publikigo k.t.p. Mi ne sukcesis nur finfari kaj eldoni "Japana-Esperanta vortaro de ideogramoj" kaj priskribi plenan metodikon de miaj kursoj kun kelkaj ideoj pri instruado de Esperanto por japanoj. En la aliaj aferoj, plej cxefe laux mia profesio, mi sukcesis neatendite. En Sapporo mi renkontis multaj gekolegoj - historiistoj kaj filologoj. Tio estigxis ebla dank'al la membroj de SATana Esperanto-grupo en Sapporo kaj Societo de Japanio kaj Landoj de Euxrazio. Krom tio, min grande impresis Hokkajda Universitato. Tuta urbo!

La plej plezura komplimento, kiun mi auxdis en Sapporo estis la vortoj de profesoro Ando (specialisto pri la rusa literaturo): "Vi laboras kiel japano!" (tio signifas fervore kaj konstante). Sed fakte mi nur volus ellerni labori kiel laboramaj japanoj. Ankaux tio necesas por nia komuna agado. Mi esperas, ke interkontribuo por niaj eldonajxoj - "Heroldo de HEL" kaj "La Pacifika Kuriero" (mi estas unu de la kunredaktoroj de gxi) farigxos unu el la plej cxefaj pasxoj al tiu direkto.

Dua oficiala lingvo en Japanio: por kio do?

日本の第二公用語：何のために？

Sergei ANIKEEV

Kiam mi unuafoje aŭdis pri tiutema oficiala deklaro, mi ne povis kompreni tuj, ĉu oni seriozas aŭ ĉu oni ŝercas. Kaj nun mi klare komprenas ke tiu estis simpla senintenca kritiko kontraŭ la Japana Edukministerio, sed dirita en pure japana ambigua maniero. Ĝa oni jam delonge kritikis la Edukministerion precipe pro ties baraktado en la afero de la enlanda anglalingva instruado.

Estas evidente, ke la fremdlingva edukado en Japanio lamas. Pri tio atestas la fakto ke la Edukministerio koncentriĝis je disponigo de alilandaj (legu: uson-anglaj) instruistoj jam sur nivelo de la mezaj lernejoj. Kaj la ministerio eĉ proklamas ke lernado de la angla lingvo egalas al proprigo de ideoj de la internacia interkompreniĝo. Sed ĉu ĉeesto de la alilandaj instruistoj fakte plibonigis la nivelon de la lingvaj scioj kaj altigis la lingvokapablon de la japanoj? Escepte de kelkaj ekzemploj, ĝenerale, drastaj ŝanĝoj ne videblas nek percepteblas. Kialoj penseblas plej diversaj, sed la plej grava estas ke je la ĉiutaga nivelo japanoj ne vere bezonas la anglan.

Kiel etno la japanoj estas treege homogenaj kaj ankauh el la lingva vidpunkto la japana nacio elstarighas. 300 jaroj de la izoligo ankauh grave helpis solidigi la nacion. Kaj kvankam post la dua mondmilito la lando estas fakte vaste "malfermita", ĉiu veninto deekstere (alilandano) stumblas kontraŭ lingvan barilon tuj post kiam li/shi lasis enmigran oficejon aŭ hotelon. Escepte de malmultaj oficistoj, kiuj ĉiutage komunikas angle kun alilandanoj laŭ siaj laborspecoj, japanoj surstrate estas nekapablaj komunikighi kun fremduloj en la angla.

Kaj tute ne helpas, ke ĉiu averagha japana infano ricevas edukadon pri la angla lingvo (la sola ŝate aprobita lernenda fremdlingvo kiel deviga studobjekto) ekde la mezlernejo ĝis la altlernejo kaj kelkaj daŭre trejnas sin en universitato.

La izoliteco estas helpata de tio ke Japanio ne havas landlimojn kun aliaj landoj tuj senpere. La maroj kaj oceanoj distancigas Japanion de la najbaroj. Tial la japanoj neniam sentis neceson kaj bezonon ĉiutage scii

kompreni alilandanojn kaj komunikighi kun ili. Kaj ech nun tiu bezono ne estas vere evidenta.

Ekzemple, en Eŭropo estas tute normale, se oni scipovas ne nur sian patrinan lingvon. Ĉar tuj najbare oni parolas tute malsaman lingvon, kaj ofte ne nur unu lingvon. (Tial tute ne mirinde ke Esperanto aperis ĝuste en Eŭropo, kies multlingveco estas konata. En Japanio Esperanto malvershajne povus aperi.) Se, ekzemple, en Belgio iu povas paroli germane, france kaj valone ? Tio ne estas io rimarkinda.

En Rusio, kvankam ankauh multlingva shtato, la eŭropaj standardoj ne multe validas. Ĉar, unue, dum la USSR-periodo ghi ankauh estis speco de izolita lando kaj, due, la rusa estis trudita kiel deviga en chiuj anguloj de Sovetio. Kaj apogis tion la unueca ekonomika vivo, ideologio kaj chiutaga bezono pri la rusa lingvo se iu dezirus prosperi je kariero. En Sovetio dum tiu tempo ne ekzistis sola fremda lingvo kiel studobjekto. Ne ankauh nun en Rusio. Ekzemple, en Chemara provinco (Primorie regiono) oni devige lernis la anglan. Sed ĉar la regiono mem estis fermita dum USSR por vizitoj de alilandanoj, nur nature dotitaj geknaboj pli-malpli sciis ion diri angle. Kaj la resto de la lernantoj estis, por tiel diri, eternaj "my name is..." angle-parolantoj. Nun, kiam la rusa socio farighis pli malferma al la cetera mondo, la situacio iom post iom shanghighas. Sed ghi neniam egalos al tiu de Eŭropo. Ĉar kontaktoj kun alilingvanoj estas maloftaj kaj estas preskau limigitaj al hotelservoj kaj similaj plejofte turismaj aferoj.

Ĉu en Japanio estas io pli speciala? Oficialigo de la angla kiel la dua lingvo en Japanio pli multe similas utopion. Ĉar lauhvole la japanoj ne shanghos sian lingvon je la angla. Nur se la japana registaro decidus efektifigi persekutojn kontrauh neuzado/ aŭh rifuzo uzi la anglan chiutage. Tiakondiche eble io sukcesos tiuflanke. Sed ne estas kredeble. Ekzemple, multaj koreoj, perforte venigitaj al Sakhalin-insulo kiel laborforto, estis senigitaj je rajto uzi la korean. Perforte trudita la japana parte adoptighis inter koreoj, sed ili plu persiste uzis kaj uzas ĝhis nun la korean inter si.

Mi estas forte konvinkita, ke komence oni devas krei socian bezonon je iu fremda lingvo, ke ghi enradikighu kaj prosperu. Jes, certe inter lingve dotitaj japanoj tiu procedo irus glate, sed ne inter la ordinara vivonivelo. En kiuj ajn nuna socio tio estas ebla nur perfortmaniere, sed ne libervole. Ĉu la japanoj deziras esti perfortitaj de sia propra registaro favore al la tute fremda kulturo?

今年はじめから「英語の第2公用語化」問題があちこちで論じられていた。エスペランチストとして考えることは大いにあると思いつつもこれをまともに取り上げる気にならなかったのは、この問題の始まりから、何かうさん臭いものを感じていたからだろう。第2公用語?すると第1公用語があるから第2を考えようというのかな、しかし日本で公用語の規定なんてどこにある? 実はどこにもない。決める必要がなかったのだ。

公用語を決めている国では、その国民のなかにいくつかの言語グループがあり、その権利を認めて国内の民族間の平和を維持する、という状況がある。日本では方言はあっても明治以来の教育で共通語(標準語)が普及し、ことばの上での大きな障害はない。日本語以外の言語を使うグループは国民の中にもいない。0.1%程度の在住外国人も、日本語に不自由しない人が多いが、最近官公庁やボランティアのサービスがかなり充実してきた。

問題の始まりは小淵首相の私的諮問機関「21世紀日本の構想」懇談会の報告書だった。河合隼雄座長によると、「当初はあそこまで踏み込むつもりはなかったが、『生きた英語教育の充実』ではインパクトに欠ける」ので「第2公用語」と出した、ねらい通りになってきたねえ、議論が湧いてきて。結構なことや」と楽しんでいる様子だという。(朝日新聞インタビュー) まずはハッキリかまして見たわけだが、これに引っかけた人も結構いるから効果はあった、ということか。

複数の公用語のある国では、公務員は国民にサービスするために、当然どの言葉でも答えられることが必要な資格になる。国会でも、首相や議員は質問された公用語で答えねばならぬ、としている国もある。あの報告書を見た政治家たち、どれだけの覚悟があるのだろうか。

「公用語」の定義も、それに対する行政の対応も論議なく「第2公用語」だけがひとり歩きする。よくいわれるアドバルーン、ハッキリかまして反応を見、ある方向に誘導しよう、との意図が見え見えなもの、「うさん臭さ」を感じる

大きな理由だった。

さて、あの報告書にある英語についての考え方は「国際共通語としての英語」とはっきり書いてある。エスペランチストの立場はどうなっているか。

古くはプロレニユ宣言。Esperantismoとは、「民族間の意思疎通のための中立の言語」を広める活動一である。民族語を押しつけ、それによって支配する過去の歴史を断ち切るところにエスペラントの立脚点があった。

21世紀へ向けてエスペラント運動の意義を示したプラハ宣言ではどうか。その第1項は、こうなっている。

1. 民主性: あるコミュニケーションの仕組みが、特定の人々には一生涯の特権を与える一方で、他の人々にはより低い段階の能力の獲得にさえ多年の努力をつぎ込むよう求めるならば、それは根本において反民主的なものである。

(以下略、JEI 訳)

読んですぐわかるように、これはある民族語を国際語として使う場合の不平等性、反民主性を述べている。簡単で規則的な文法のエスペラントは、平等な国際的コミュニケーションのために生まれたものなのだ。

英語でしか通じないとき、外国人と英語で話すことはよくあったし、やむを得ない。しかし一つの民族語を国際語として押しつけるなら、それは上に見るようにエスペラント運動のよって立つ基本理念とは相容れないものといわざるを得ない。ザメンホフはロシア語、ポーランド語、ドイツ語、イディッシュ語は自由に使っていたし、当時のロシア領ポーランドの公用語はロシア語だった。この四つの言語グループ(民族)の間の日常的な摩擦、争いが、彼に「中立の国際語」の必要を考えさせることになる。優勢な(支配的)民族の言葉が「共通語」「公用語」で当然だと、彼が現状を是認していたら、はじめから、エスペラントが生まれることはなかっただろう。

Ni, membroj de HEL, esperantigis la Ainajn Jukarojn.

Mi interesigas en aina-lingvo pro la lingva-gramatiko enhavita en la libro.

La verba-termo de la lingvo estas preciza.

La japanaj gentoj trudis japana-lingvon al aina gento laux malhumana metodo. Tial mi faras la lingvan artikolon por la aina-lingva jxurnalo

"AinuTimes" por restituo de aina-lingvo kun aina gento.

Nun preskaux cxiuj ainaj gentoj nur parolas en japana-lingvo.

Al mi s^ajnas, ke la aferoj por la restituo atendas multajn malfacilojn.

後の記事は、胆振地方虻田町の遠島タネランテさんによるユーカラ「有珠山の噴火」から一部を参考に
して記述しています。

なお、岩波講座日本文学史第 17 巻口承文学 2 (岩波書店) の 240 ページに、そのあらすじがありました
ので、ご紹介します。

[有珠山の噴火]

「静かだった村に、ある時から地震が起きる。幾日も地震が続き、とうとう夜中から火山が噴火し始めた。
海に逃げたものは焼け死に、村は全滅してしまった。その後、逃げた人々が戻ってくると、村の長老が祈
る姿のまま焼け死んでいた。人々は、泣き、まわりの村の長老たちは死んだ人々の魂が神のところへ行く
ように祈る。そして、まわりの村人から人が集まって村を再興した。」

[注釈]

(Noto)

La aina-lingvo "Ap-ta" estas la loknomo, kiu signifas "fari fisxhokon".

Oni nomas "Ap-ta"-on "Abuta"-o en japana-lingvo.

La aina-lingvo "maciya" signifas urbeton.

La aina-lingvo "Us-nupuri" estas la nomo de la monto en la loko, kiu
nomas "Us".

La aina-lingvo "Us" estas loknomo, kiu signifas "golfo".

Oni nomas "Us-nupuri"-on "Usuzan"-o en japana-lingvo.

La aina-lingvo "to" signifas lagon.

La aina-lingvo "ya" signifas bordon.

La aina-lingvo "To-ya" estas loknomo, kiu signifas "bordon de lago".

Oni nomas "To-ya"-on "Tooya"-o en japana-lingvo.

[火砕流の説明] (アイヌ語)

KASAIRYUU sekor a=ye p anak, nupuri opus hi ta, nupuri tumu wano sonno
sesek

火砕流といわれるものは、山が噴火した時、山の中から 本当に熱い

suma neya piyota neya una neya sesek mawehe neya nen nen ukopoyke wa
nupuri kotor

石やら 火山灰やら灰やら 熱い空気が、色々と混ざって 山の表面

peka upas-horutke koraci, okimunpe koraci, horutke wa san pe ne. Sonno
pikan.

に 雪崩のように山津波のように 崩れ下るものです。本当に俊敏に動きます。

Nitay ne yakka kotan ne yakka opitta uhuyka. Sino iyaykipte p ne.

林であっても、村であってもすべて燃します。たいそう危ないものです。

Us-nupuri (Usu-zan) opus ruwe ne.

有珠山が噴火しました。

La monto Us-nupuri (Usuzan) erupciis.

2000 pa 3 cup kese pakno Ap-ta maciya (Abuta-tyo^) or ta sirmo a
korka,

sine an hi wano sirsimoye kaska hi a=oyamokte ruwe ne.

2000年3月末、虻田町は今まで大地は静かであったけれども、どういうわけだか、ある時から地震が
起こりすぎるので不思議に思いました。

En la fino de marto en 2000, kutime estas senmova la tero en la urbeto

Ap-ta maciya (Abutatyyoo), sed ekde iam tertremo tro okazis, tial oni pensis, ke estas strange.

kesto an kor sirsimoye kus, ne maciya or un utar kira pa ruwe ne.

何日も地震が起きたので、町の住人が逃げました。

Ekde tiam, tra kelkaj tagoj tertremo tro okazis, tial la urbeto logxanto
rifugas.

okake ta, 2000 pa 3 cup 31 to ta Us-nupuri (Usu-zan) opus ruwe ne.

そのあと、2000年3月31日に有珠山が噴火しました。

Poste en 31-a de marto en 2000, la monto Us-nupuri (Usu-zan) erupcias.

Us-nupuri (Usu-zan) anak te pakno arwan suy opus sekor a=ye ruwe ne.

有珠山は、今まで、7回の噴火があったと言われています。

Oni diras, ke gxis nun la monto Us-nupuri (Usu-zan) erupciis sep fojojn.

1663 pa ta, opus hine cise uhuy wa asiknen isam.

1663年には、噴火して、家が焼失して5人死亡しました。

En la jaro 1663, erupciis, la domoj forbruligxis kaj kvin homoj mortis.

1769 pa ta, nupuri opus wa apehe rap kusu, poronno cise uhuy ruwe ne.

1769年には、火砕流があつて、家が焼失しました。

En la jaro 1769, la fajra-erupcio trovigxis kaj la domoj forbruligxis.

1822 pa ta, opus apehe rap wa Ap-ta kotan a=arustekka wa waniw erehotnen isam.

1822年には、火砕流があつて、虹田集落が全滅し、50名亡くなりました。

En la jaro 1822, la fajra-erupcio trovigxis, la vilagxo Ap-ta kotan komplete detruigxis kaj kvin-dek homoj mortis.

orwano opus kusu 1853 pa ta O'usu hetuku wa 1910 pa ta Me'zisinzan hetuku wa

1944 pa ta Syo^wasinzan hetuku ruwe ne.

その後、噴火で1853年には大有珠ができ、1910年には明治新山ができ、1944年には昭和山ができました。

Poste en 1853 la monto Oousu aperis, en 1910 la monto Meezisinzan aperis kaj en 1944 la monto Syowasinzan aperis.

1822 pa ta, Ap-ta kotan un utar anak hoskino nupuriopus hi ta anakne kira pa korka, wan to pakno siran i ta "tane pirka nankor" sekor yaynu kor hosippa ruwe ne.

1822年には、虹田の住民は、最初に火山の噴火があつたときは避難しましたが、10日ほど経つたときに「もういいだろう」と考えて戻りました。

En 1822, la logxantoj de la vilagxo Ap-ta kotan rifugxis kiam la monto erupciis en unua fojo kaj post cxirkaux 10 tagoj, ili pensis, "Jam bone." kaj revenis hejmen.

korka kannasuy nupuri opus kusu, inne utar isam ruwe ne.

しかし再び火山が噴火したので、多くの人々が亡くなりました。

Sed la monto re-erupciis, tial multaj homoj mortis.

arsuy nupuriopus kor, orwano sirno pekor a=nukar yakka sonno ka iyaykipte ruwe ne.

一度火山が噴火すると、その後静かなように見えても、本当に危ないのです。

De kiam monto erupcias unufoje, ecx se oni trovas, ke la tero estas senmova, estas vere dangxere.

Unzenhugendake ka neno an pe ne.

雲仙普賢岳でも同じでした。

La kazo pri Unzenhugendake estas sama.

1822 pa ta, Us-nupuri (Usu-zan) oruspe anak yukar or ta ka a=ye hawe ne.

1822年に噴火した有珠山の話はユーカラの中にも言われています。

En 1822, la rakonto pri erupciinta Us-nupuri (Usu-zan) estas parolita en

la aina-genta rakonto-versajxo Jukaro.

Siraw-o-i (Siraoui) un Aynu-minzoku-hakubutukan sapte kenkyu^{ho}kokusyo
iye-inep(4) (dai 4 go[^]) ka ta ne yukar a=nuye ruwe ne.

白老のアイヌ民族博物館の研究報告書第4号に、そのユーカラが書かれています。

Oni publikis la Jukaron en Kenkyuu-hookokusyo iye-inep(4) (dai-4-goo)

(n-ro 4 de raportajxo de studo) de Siraoui-Aynu-minzoku-hakubutukan (La Muzeo pri aina-gento en la urbeto Siraw-o-i (Siraoui)).

ne yukar or ta, annoski wano opus nupuri, opus apehe rap wa Ap-ta kotan
a=uska.

そのユーカラには、真夜中から噴火した山の噴火した火が落ちて、虻田の集落を消し、

En la jukaro, la fajrajxoj de la erupciinta monto falis ekde plena nokto,

kaj la vilagxo Ap-ta kotan perdigxis.

Ap-ta kotan orowa kira wa paye p anak, atuy or un terke p uhuy suma
neya piyota neya rap kusu sapa uhuy hine, rawoterke yakka atuy wakka ruki
ayne hon-pisese, sekor an pe a=nuye ruwe ne.

虻田の集落から、逃げた者は、海に飛び込んでも頭が焼け、飛びこんでも、海水を飲んで、腹を一層ふくらましましたと書かれています。

La homoj, kiu rifugxis de la vilagxo Ap-ta kotan, saltis en maro, sed
fajriantaj sxtonoj kaj vulkanpolvoj kaj aliaj falis, tial la kapoj fajris.

Ex se la homoj saltis, trinkis maran akvon, finfine la abdomenoj
sxveligxis, tiel estas skribita.

tanpa ta anakne utari opitta yayitupare kusu, nen ka somo ray ruwe ne.

今年は(地元の)みんなが注意したので誰も死にませんでした。

En nuna jaro, la cxuij logxantoj atentis, tial neniu mortas.

To-ya maciya (To^yakoonsen-tyo[^]) cuppok ta an nupuri utorsam wa opus.

洞爺の町(洞爺湖温泉町)の西の山麓から噴火がありました。

Erupcias disde la flanko de monto en la direkto al okcidento de la urbeto

To-ya maciya (Tooyako'onsen-tyoo).

3200 me^toru pakno supuya at pe ne ruwe ne.

噴煙の高さは3200mでした。

Fumis gxis altaj 3200 metroj.

16000 pakno oka utar kira pa ruwe ne.

一万六千人の人が避難しました。

Cxirkaux dek ses mil homoj rifugxis.

To-ya maciya (To^yakoonsen-tyo^) or ta sesek toy wakka an wa, nupuri

ouske ta an cise a=perpa ka ki, terke suma tomo osma ka ki ruwe ne.

洞爺の町(洞爺湖温泉町)では、大きな熱泥流があって、それで山のふもとにある家が壊されたり、飛んだ石が(家に)ぶつかったりしました。

En la urbeto To-ya maciya (Tooyako'onsen-tyoo), varmega-akvo enhavanta

malsekan terajxon multe fluis, tial la domoj cxe la flanko de monto

dispecigxis kaj saltintaj sxtonoj koliziis al la domoj.

okake ta pene toy neya piyota neya poronno oka korka, tane utari

sitcasnure kor oka.

その後、ぐちゃぐちゃの土(泥流)やら火山灰やらがたくさんありましたが、

今は人々が街を片付けているところです。

Post tio, malseka terajxo kaj vulkanpolvo kaj aliaj estas multaj, sed oni

pure formetas.

tunasno ne utari opitta hosippa wa apunno oka yak pirka sekor ku=yaynu.

早く全員が帰宅できて安心して暮らすことができればよいと思います。

Mi pensas, ke estas bone, se la cxuiuj logxantoj frue revenas la hejmon

kaj trankvile logxas.

Libroservo de HEL 図書部より

図書部では、現在、図書購入の準備をしています。

購入希望図書があれば、2001年1月末までにお知らせください。

購入図書の参考にさせていただきます。

図書部長 宮沢 直人 (TEL/FAX 011-717-4189)

(木村護郎さんの2000年5月合宿での発言)

世界の先住民族とエスペラントとこれまでどういう関係にあったか、国際的なものを2つ紹介します。

Internacia Komitato pri etnaj liberecoj (民族の自由のための国際委員会)、これについては星田さんが詳しいと思いますので、詳細についてはお聞きください。

1978年から活動し、代表的な活動雑誌「Etnismo」を出しています。ここで、世界の少数民族とか先住民族に関する情報を色々と紹介して、お互いに情報交換する媒体として出しています。

1999年12月号では、ブラジルの先住民族のことを述べています。また、東チモールの独立の話、今話題になっている最新の先住民族とか少数民族関係のことをいつもとりあげる雑誌です。

エスペラントが、お金になるかという話題が出ましたが、役にたつか立たないかというの大きな問題だと思います。先住民族、少数民族に関心を持っている人にとっても、こういう雑誌もあるし、委員会の活動もあるので、エスペラントはそこそこに役にたっていることばになっていると言えると思います。ですが、これは先住民族だけを取り上げているわけではありません。

これに対し、もう一つの方は、先住民族のこととエスペラントの直接のつながりのプロジェクト(計画)なのですが、Indigxenaj Dialogoj「先住民の対話」というのがあります。

これは、エスペラントとインターネットを通して、世界の様々な先住民族が相互に交流していこうというプログラムです。

オランダで英語、ドイツ語、エスペラントを教えている語学学校の経営者のところへ1998年5月に中央アメリカのコスタリカ先住民族の人が、尋ねてきました。その人と話しをしていて、先住民族が相互に交流したいと思っているのだが、なかなか言いたいことがうまく言えなくて困っているという話がありました。

それを彼が聞いていて、自分のところは語学学校があるから、講習料はとらずに、先住民族が直接相互に話ができるように、語学とインターネットの講習会をやろうと考えて、1998年10月にアメリカで、世界先住民族会議があつて、その時などに先住民族が集まる機会に参加者を募集しました。

それが実際に実現したのが去年9月(1999年9月)で、オランダの語学学校で初めてエスペラントとインターネットの講習会を行いました。その時は22人、18の先住民族が参加しました。ニューギニア、モロッコ、ルワンダ、ブルキナファソ、ロシア、アラスカ、コスタリカ(中米)、グアテマラ(中米)、チリ、インドの10数カ国です。3週間の集中講座です。

1週間目は、朝から晩までエスペラントを勉強しました。講座のレポートによると、朝から晩までエスペラント漬けで講師も疲れたとありました。学ぶ方ももっと大変だったと思います。時間がないので集中的にやったと思います。

2週間は、エスペラントを使って、自分たちの民族のホームページを自分たちでつくりました。色々な様々な先住民族のホームページを作りました。

3週間は、そのホームページで相互に交流したり、それぞれの民族の踊りとか歌の交流とか、ホームページを発展させて相互の問題とかを交換するプログラムでした。

去年の11月(1999年11月)にまた10名ほど参加して第2回目が行われました。この調子でやっていこうということですが、現実には、お金が足りないとか、非常に長期的に持続させていくのが難しいという状況にあります。

また、これを考えた人は、大きなビジョン、壮大な計画を持っています。この人の計画によると、2005年までに間に250の民族を参加させて、ネットワークを作っていくとし、民族相互のネットワークを使って先住民族大学を作ろう、現実の場所に実際に建てるのではなく、インターネットの中で相互に、たとえば、アイヌの世界観を紹介する、南アメリカの世界観とか、自然観とかを紹介していき、相互に交流していくことによって、仮想のインターネットの中の大学を作っていくことを計画しています。その時のことばの一つとしてエスペラントが使えるのではないかとっています。

そして、大学をさらに発展させて、先住民族の国際連合を作っていくとも考えています。国連は、国を持っている人だけを代表します。日本、ロシア、アメリカとか国を持たないと、代表権がなく、今、国連の中でも先住民族の作業部会とか、だんだんとNGOが入る要素が出てきましたが、やはり国単位になってます。そうすると、いつまでも、先住民族の人たちは、国連の中で自分たちの声を出していくことができない。それで、自分たちで世界と連帯していくという組織、ネットワーク、組織というはっきりとしたものでなくても、ネットワークがあればいいのではないかと考えていて、その考えの一つのきっかけとして「先住民族の対話」という、一つのプログラムを考えたわけです。

今後、どのように発展するかというのは、一人一人がどのように参加していくかということに関連していきますが、こういう案が出てくるのは参考になり、今日のテーマ(アイヌ語とエスペラント語)に関連すると思うので紹介しました。

先住民族は、支配的な文化に対してオルタナティブ(代替案)を出す可能性があるといえるでしょう。違った世界観とか、違ったことばとか、違った文化とかを出してきてることができます。それに関してエスペラントというのも、英語と対比がありましたが、違った形でもっといいコミュニケーションができるのではないかと一つの可能性を持っています。コミュニケーションに関する一つのオルタナティブ(代替案)を提示しているのではないかと思います。そうした場合にエスペラントと先住民族という一見何の関係もない二つのオルタナティブ(代替案)ですけれども、今紹介した例のように結びついて運動を進めていき、発展していく可能性があると思います。

色々な先住民族の人も、エスペラントに興味をもっていただくとおもしろいと思います。エスペラントをやっている人もコミュニケーションの平等というエスペラントの基本理念というのが、先住民族のことを考えないと、まやかしになると思うので、そういう意味でエスペラントの人も、先住民族の人と、特に北海道というのは、アイヌ民族が身近にいますし、相互の交流というのを深めていく機会が今後もあればいいなと思っています。

星田淳様

お久しぶりです。渡辺晋道です。

実は、9月27日から30日まで、モンゴル、ウランバートルへ行って来ました。前から思っていたのですが、エスペラントの為にエスペラント語を使うのではなく、社会活動の為にエスペラント語を使いたいと思っていました。

そこで、モンゴルのエスペラント連盟を通じて、Betub dangxaj cxojnhorling 寺の長をされている、S-ro Dogsuren (得度を受けているが僧侶ではない)を昨年、紹介され、数回、文通していました。そして、この度の訪問となりました。

下記の内容は、少し手直しをして、私が出している『寺報』へ載せます。また、私たち西山派で、フリー メーリング リストを設けていますので、そちらへも投稿します。

S-ro Dogsuren氏をご存知でしょうか？

9月27日から30日まで、モンゴル、ウランバートルへ行って来ました。

今回の訪問の目的は、

- 1) ウランバートルの仏教と社会の状況を知ること。
- 2) 支援活動(いわゆるNPO)の方向を探ること。
- 3) 日本浄土教の布教の道を探ること。

の、3点になります。

そして、2)のために、檀家さんから集めたセーターを持参しました。

さて、結果を以下に報告します。

1-1) ウランバートルの仏教の状況

現在、16の寺院があり、内3寺院のみが赤帽派(カルマ・カギユ派)で、残りが黄帽派(ゲルク派)だとのこと。

ゲルク派の本山といえるのはガンダン寺で、住職は、Cxojgxmc 師だとのこと。

実は、ガンダン寺の住職は、知恩院の執事長と個人的に知り合いで、9月に行なわれた、晋山式に出席し、仏教大学へ赴き、27日の飛行機でウランバートルへ帰りましたが、その飛行機に、私は同乗して、訪問しました。

Betub dangxaj cxojnhorling 寺は、元インド大使であった Kuxok Bakula 師が、私財1億円(レート換算)を投じて建てた寺院で、1999年9月に創立式典を行なったばかりです。(建設には、3~4年かかったそうです)。

そして、Kuxok Bakula 師は、リンポチェの称号を得た方です。

ウランバートルには、リンポチェが4人だけいますが、活仏はいないそうです。その師は、丁度、29日にインドへ帰るところでしたので、運良くお会いすることが出来ました。

モンゴルのチベット密教では、観音菩薩を信仰していますが、観音菩薩は、釈迦滅後、弥勒菩薩の下生まで、この世を預かる菩薩とされているそうです。しかし、遊牧民なのに、馬頭観音はいないそうです。

1-2) 社会、経済の状況

経済状態が良くないと聞いていましたが、都市生活者には、強い実感はないようです。しかし、非労働者、失業者が多いのは事実です。

都市生活者の給与は、空港-ホテル間を送迎してくれた、今年5月に就職した、日本語を話せる、若い女の子で、1ヶ月1万円(レート換算)とのこと。ホテルでフロントを担当していた、やはり日本語を話せる若い子で、こちらは6千円(同)とのことでした。

遊牧生活者は、一つのゲルに一家族が住んでいました。日本人の目から見て、近代的是と思えませんが、生活のレベルは、都市生活者よりも上だ、とのこと。トラックや、バイクを持っていることがその証だと話していました。

遊牧生活を離れ、都市へ向う人々が増えているそうです。ウランバートル市内には、アパートが建っていますが、郊外には、バラックのような家や、ゲルが建っている区画があります。それらの中には、都市への定住を始めた人々もいるとのこと。

あの広いモンゴルに、約220万人しかなく、そのうちの約70万人がウランバートル市内に住んでいるとのこと。

経済状態が良くない中、都市の人口が増えるということは、失業者を増やし、犯罪の温床を広げることになります。現地の方は、荷物を車の中に置かないなど、かなり注意した行動を取っていました。

ここ数年で、自動車の数がずいぶんと増えたそうですが、交通のマナーは異常に悪く、一人で歩けたものではありません。タクシーは少なく、いわゆる白タクが正当な交通手段のようです。

私の運転手をしてくれた方は、今回、面倒を見てくれたエスペ란ティストの知人でしたが、定職が無く、白タクを家業としていました。日本流に言うと、フリーターが多いようです。

物価について、一概に言うことは出来ませんが、例えば、お米1キログラムが300トッグリク(=30円)など、日用的なものは、日本の10分の一程度だと思われる。

ちなみに、CDが一枚590円、テープ110円、焼酎500ml1500円などでしたが、カシミアのセーターが、外貨ショップで4000円程度、デパートでは7000円程度でしたし、前述のように、給与収入が日本の30分の一程度であることを考えると、ますます、一概には言うことが出来ません。

遊牧生活者のほうが、食物や現物を所有しているのですから、生活レベルは上だと言われるのも、真実でしょう。

2) 支援活動(いわゆるNPO)の方向を探ること

支援活動というと、金銭的な方法、物資による方法を思い浮かべます。

今回、檀家さんから集めて貰ったセーターを20着以上持っていき、エスペランティストの方のお寺で配ってもらうことにしましたが、上述のような物価の状況を考えて、受け取った人が着ることは無く、ザハ(フリーマーケット)でお金に換えられるだろう、と言われました。

また、ある日本女性が、寄付した学校を見せてもらいました。女性の名前は忘れましたが、5年程前に建てられた学校で、エスペランティストの彼の意見では、今、モンゴルに不足しているのは、教育だとのこと。

お金を送っても、どこに使われているのか分からない。物資を送っても、使われずにお金になってしまう。国レベルで行なう救援活動も、NPOも、仏教徒が行なう布施も、難しいと思われ知らせました。

3) 日本浄土教の布教の道を探ること

私が乗った9月27日の飛行機には、キリスト教の宣教師が3名乗っていました。そして、上述の、リンボチェがインドへ帰る29日の日には、偶然、また、空港にいました。聖歌か何かを見送りのモンゴル人たちと歌っていました。彼らは、世界中に飛び散っています。

ガンダン寺の住職と、知恩院の執事長は、個人的な付き合いですが交流があります。そして、宗派を超えて、寺院同士の交流に発展することでしょう。

私たち、浄土宗西山派の教えを、モンゴルの人々が受け入れる余裕は、まだまだあります。何故なら、彼らは、観音菩薩を信仰し、そして、老境に到った時、来世の幸せと、良い生まれ変わりを願って、阿弥陀仏へ祈り始めるそうだからです。

こちらから、エスペランと訳した浄土教の本を送ったら、モンゴル語、ロシア語、に翻訳してくれることを、エスペランティストの彼は約束してくれました。出版の費用さえ都合すれば、モンゴルの書店に、浄土宗西山派の本を並べることは可能です。もちろん、読んでもらう為には、別のアプローチが必要ですが。

(最後に：エスペラント語の旅をして)

約3日間、ほぼ、エスペラント語だけで生活したことは良い経験でした。今までに、エスペランティストを自宅に泊めたことは、数回ありましたが、今回のように、さすがに宿泊はホテルでしたが、食事、移動、見学、解説、買い物と、実に親切に面倒を見ていただいたのは、初めてのことでした。まるで、ウルルン世界滞在記のようでした。

このような経験が出来るのは、エスペラント語の特権ですし、このような経験は、私のような中年になってからより、本人の為にも、世界的な利益の為にも、10代のうちにしたほうが良いと思います。

Kiuj kaj kioj vi estas – poetoj el Ĥabarovsk ? (2)

ハバロフスクの詩人たち (2)

Mihail E. KORĈIMARJOV

Ĉiu, kiu renkontis poeton – bardon Andrej Zemskov, parolis kun li, aŭdis liajn kantojn, ne povis ne ekvidi du ecojn de poeto kun gitaro – poezian talenton kaj homan modestecon. Kaj ni ĉi tie estos analizantaj ankaŭ ecojn. Unue, malmultaj poetoj verkas tiel interese, kiel Andrej. Sed due, Andrej opinias, ke liaj rimarkindaj versoj kaj kantoj estas ne merito, sed literatura normo. Kiam Andrej kantas siajn kantojn, li absolute ne volas konvinki nin je sia intelekta, versa supereco. La poeto nur prezentas sin, malfermas sin, postulante de ni nenion. Kaj Andrej – kiel poeto kaj homo – ne estas “objekto en si”, li ĉiam estis, estas kaj estos “objekto por ni”.

Kion ni devas rimarki en la poeto Zemskov? Talenton, verkan energion, profesiecon? Kion ni rimarkas en homo Zemskov? Jam menciitan modestecon. Andrej ne konvinkis iun iam je sia talento – liaj versoj faris ĉi tion anstataŭ li. Ni ne parolos pri frua Zemskov aŭ malfrua Zemskov – ni ne bezonas tion. Sed memori ĉion, kion verkis Andrej dum dek lastaj jaroj ni devas. La poeto, ĉe kiu “la gitaro alfiĝas sin al manoj”, ĉiam estos estimata. Juna ankaŭ hodiaŭ Andrej kantas ne nur pri si. Li ankaŭ havas grandan tempan kaj spacan fantazion. En siaj kantoj li povas paroli pri estanto kaj estinto. Kaj li mem prenas nin kun si en mondon de alta poezio. “Ĉi tiu mondo ne estas komforta. Kaj en ĝi oni nin ankoraŭ ne alvokis” – diris la poeto. Ni vidas ĉi tie spiritecon de l’ poeto. Sed Andrej en siaj versoj ne aspiras nur al spiriteco, ne nur celas nur al rafiniteco, svelteco.

(Aspiro al lastaj ecoj karakterizas versojn de Marina Savcenko.) En versoj de Andrej ni vidas sekvon al testamentajo de Aleksand Blok – “komforto malestas, kvieto malestas”. Tial ĉi tiu mondo ne estas komforta por Andrej. Sed li neniam kasis sin de ĉi tiu mondo. La poeto vivas inter ni, kun ni kaj unuavide vivas kiel ni. Sed afero estas en tio, ke la mondon ĉirkaŭ ni li vidas tiel kiel vidas nur li kaj neniu alia.

“Eniru en vian malĝojon kiel en vian malnovan domon kie domfantomoj sur stangeto vivas, kie la tempo forvisis ornamenton sur fajenca taso.” Kaj linioj, “la sojloj de preĝejoj ne donas enspezon al preĝantoj. En sia patrio profetoj, kial en estinto, celas al disidenteco” estas nur Zemskovaj linioj. Ni ĉiuj memoros neripetablajn versojn de Andrej – tragediajn, komediajn, historiajn, satirajn – por iu ajn gusto. “Nia kunvojaĝanto, kun vi estas? Ĉu sama ŝtatestro Puĝiĉ?” “Kion diras vi, knabo kun spado, al generaloj sen honoro spadoj” “Ikonpentristo oktobro farbas per oro la ĉielon sur mi kaj vian harligon.” Io mirinda en ĉitiu universaleco de l’ poeto, vivante inter ni, ĉiam konas esti tie, “kie kameno kaj miela vino varmigas ĝis mateno la animojn de vagabondoj.” Kaj ni opinias ke Andrej povas diri pri si tion, kion li diris pri aliu. “La trio da sorĉistoj nevideble eniras aŭskulti lin.” Kaj por pli bona konado la versojn de l’ poeto ni proponas al leganto unu version.

*Kien vi hastas, unusola,
 Simila al sombro, pilgrimo?
 Iras rompitaĵoj vojoj
 En ĝisbrulitan per barbaroj Romon.
 Kaj fluganta cindro suforas
 La preĝon, fariĝintan krio.
 Viaj vortoj atingu orelojn de l'Dio.
 Sed li ne havas intereson al ili.*

Ĉu Andrej estas unusola en siaj romantikaj sercoj, en sia amo al ĉio alta, brilanta, neĉiutaga? Ne, certe. En Ĥabarovsk Andrej havas multajn samideanojn en vivo kaj verko. Unua inter ili estas rimarkinda poetino **Marina Samarkina**. En ŝiaj versoj ĉeestas tiu poezia maltrankvileco, tiu poezia ardeco en sentoj kaj pensado, tiu nevolo adapti sin al ĉiu taga banaleco, kiuj ĉiam karakterizis verajn poetojn. Versoj de Marina estas pli trankvilaj, harmoniaj, pli integraj ol versoj de Andrej. En ĉi tiuj versoj poeta ribeleco, poeta malkonformismo estas akre esprimitaj, videble esprimitaj, multaj linioj de l' poetino estas eĉ arogantaj, ŝokantaj. Tamen Marina jam dum multaj jaroj ne ŝanĝas siajn verkajn principojn kaj ne faras ian sekreton el ili. Male, tre malmultaj poetoj estas pli honoraj, noblaj, malkaŝemaj ol Marina. Kaj malmultaj poetoj konas verki tiel bone kiel Marina. Kio estas "verki bone" por Marina? Ĉu nur senerare observi la melodion de verso, ritmon, rimojn? Ne, ne nur tio. Jes, Marina konas verki tiel, ke oni volas akompani per gitaraj ritmoj: "Ah, printempo, kia forto! Kiel mi komprenas vin! Vi malaperas angle, permesinte min gluteti amon, kiel vinon." Ĉi tiun verson (kiel kanton) oni ofte aŭdis je bardaj koncertoj. Sed ĉefa bona eco de Marinaj versoj – ilia literatura unikeco. Neniu povis konvinki Marinan verki kiel verkas aliaj. Marina analizas kaj konceptas ĉiun temon, kiel suforas al si tiu sama ne trankviligita per io poeta animo, "Mi iras super abismo ne sciante vojon" – diras Marina. Kial? Marina respondas mem: "Kie estas lumo, tie estas celo. Mi ne bezonas bonfarton. El ĉiuj manieroj de vivo – nur ĉi tiu vojo. Kvankam la korpon lacigas ĉiu paso, la vojo estas realeco, la vojo estas bonfarto." Neniaj figuroj en ŝiaj versoj estas banalaj, tradiciaj, malklaraj. Ĉi tion pruvas multaj citaĵoj el versoj de la poetino. "Ne, mi ne mortos ĉe barilo, kvankam mi meritos tion. Sed dismordinte la pomon de malkonkordo, mi estos vivanta kun ĝuiĝo." Aŭ "Ĉiuj gutoj, ŝprucoj, fluoj, kiuj nur estas en mondo, estas komponantoj de mia vivo, ĝia bona famo. Mi metos pulmojn sub kuracantan akvon kaj trinkos kun avido." Aŭ "Sur areno fremda al mi, blankigita per kreto mi karakolas sur ĉevalo blanka sur blanka." Iu alia malofte povas verki pri si kun tia braveco kaj sincereco. Tamen en Ĥabarovsk estas poetoj, kiuj, estante pli prudentaj, pli timaj kaj intimaj en siaj versoj, en sia maniero skribas ankaŭ tre originale kaj interese.

Ĉu signifas tio, ke Marina kaj Andrej ne havas en Ĥabarovsk literaturajn antipodojn, kiuj montras sian talenton en pli milda, delikata, neŝokanta formo? Ĉu en Ĥabarovsk estas poetoj,

kiuj ne malaprobas banalan kaj nejustan mondon sed, male, admiras la mondon, prikantas ĝian belecon? Certe tiaj poetoj estas kaj ni ĉi tie diros pri **Marina Savĉenko**, **Gennadij Doroŝenko**, **Igor Potapenko**. Ĉiuj menciitaj poetoj ne ŝatas paroli pri si tro laŭte, arogante, parolante kun la tuta mondo, sed ili simple ŝatas la mondon. Kaj ĉi tiu malgrava, eĉ ete facilmensa, sed tre rafinita kaj delikata percepto de realeco ĉeestas en preskaŭ ĉiu verso de **Marina Savĉenko**. *“Frua aŭtuno eniras facile. Pomoj falas de pomujoj. Frua aŭtuno – kiu venkos kiun? Ĉu aŭtuno, ĉu somero? Venis tempo – blankigi domajn vandojn, sterni tablotukon kaj meti vinujojn.”* Kion plu povas diri Marina? Si, certe, diras pri malmultaj objektoj, sed kiel si parolas! Ŝi perceptas la mondon ne tre profunde, sed kiel malbanale, maltradicie ŝi montras sian percepton de l’mondo. Legante kaj aŭskultante Marinan, oni povas forgesi signifon de dirita, estante ĉarmita per vortoj. *“Malfermante sezonon de l’somero ni eniras en niajn vilaĝdometojn. Tie niaj ombroj iras kaj forflugas kun vento. Infana scivolo estas firma kaj nealiĝebla. Ni eniras kiel submarino en maron, en misterecon de aliaj mondoj.* Tia sama magio de vortoj, alta muzikeco ĉeestas en verkoj kaj de alia Ĥabarovskano – **Gennadij Doroŝenko**. Versoj de Geĉjo – estas tiaj versoj, kiujn oni volas ne komenti, sed citi. La poeto ne aspiras instrui nin, konvinki nin je praveco de iuj ideoj sed liaj versoj mem konvinkas nin, ke ilia aŭtoro estas vera lirikisto. Ĉiuj vortoj, farboj, imagoj en jenaj versoj sonas ege lirike. Kiam ni legas versojn de Gennadij, ni kredas, ke apud lia hejmo, domo reale kreskas betuloj kaj en lia ĉambro oni sentas la odoron de muziko kaj ŝonĝo. Ni, krom ĉi tio, devas diri ke la versoj de l’poeto ofte estas malgajaj kaj ete pesimismaj, eĉ tragediaj : *“Vi malaperos kiel malklara spiro de ruĝa rozo kaj post vi forkuros pluvegoj kaj bruliĝos pontoj.”* Sed bona poeto absolute ne devas en ĉiu kazo esti vivĝoja optimisto, li devas esti verkisto, kiu faras la duan sian propran realecon sur bazo de unua, tuthoma realeco. Ĉi tiu unua realeco fariĝis terura tragedio por alia talenta Ĥabarovska poeto – **Igor Potapenko**. Ni opinias, ke la sorto de tiu poeto, kiu dum sep jaroj ĉiutage (kaj rezulte senekcese) luktis kontraŭ sia morto, estas digna kaj meritas atenton de multaj. Sed ni unuavice interesiĝas per versoj de la poeto – versoj, elvokantaj la plej veran, sinceran intereson. *“Tufoje estas noktoj detruitaj per sendormado. Lasinte tedintan liton mi tiel volus tuŝeti la lunon kaj kisi ĉiun stelon.”* Ne ĉiu poeto povis havi tian infanan kaj klaran, puran percepton de vivo. Kaj kiom da diversaj versoj-amaj, tragediaj, filozofiaj verkis poeto, kiun terura malsano alfiksis al lito – dum longaj sep-jaroj! *“Niaj sekretoj estas malkompendeblaj. Niaj celoj estas ne sciataj. Niaj ĝojoj estas okazoj. Nia doloro estas kun ni de lulkorbo.”* Malgajaj tragediaj pensoj. Sed kun ili estis skribitaj aliaj : *“Sunlevo kantis kiel bona estas mondo, ĝi kantis ĉi tion mil jaroj malantaŭen. Tiel ĉiam rido venas post doloro, kaj tempo ĉiujn faras amikoj.”* Ve, en la lasta jaro de sia vivo Igor Potapenko ne konis eĉ ridi. Anstataŭ li ni ĉi tiam havas liajn ridantajn versojn. Kaj kiom da veraj altartaj versoj skribis jam kaj skribos plej junaj kaj preskaŭ junaj poetoj kaj poetinoj el Orienta urbo Ĥabarovsk? Ni scias certe – multajn versojn. Kaj, krom tio ni tre volas, ke la nomoj de Ĥabarovskaj poetoj estu konataj per granda kiomo da legantoj, enigante legantojn – esperantistojn.

FINO

REVENIS LA ĈEVALO AL HEJMLOKA ĈIELO

ふるさとの空に帰った馬 《再録：Heroldo n-ro 57 (1995 年)に掲載》
verkis KOGURE Masao, tradukis ŬATANABE Sindoo
木暮 正夫作、渡辺 晋道訳

Ĉi tiu rakonto troviĝas en lernolibro por knaboj ĉe lernejo. Trovinte ĝin, budhisma pastro s-ro Ŭatanabe Sindoo tradukis ĝin en Esperanton kaj malkovris voĉlegante ĉe la kunloĝado de HEL en 1995. Ĝi jam vidiĝis en Heroldo en 1995, tamen mi ree montras ĝin ĉi tie pro mia kortuŝiĝo pro la rakonto. Mi larmas tajpante.

5 年前に Heroldo に載った作品ですが、とてもいい話なのでまた載せます。少年がかわいがっていた馬が、軍馬として徴用されて、列車に乗せられて行ってしまいました。戦争が終わり、少年は駅に行っでは馬の帰りを待ち続けました。おとなになった少年はその駅の駅長になっていました...

En la fino de norda urbeto, izole troviĝis malgranda stacidomo. Post la mallonga somero, multaj ruĝaj libeloj flugis facile.

“Ek!” La dizela vagonaro, en halto ĉe la stacio, fajfegis, kaj malrapide ekkuris.

Staciestro de la malgranda stacio forvidis la duvagonan trajnon starante sur la kajo, kaj li revenis la ĉambron de staciestro kaj prenis la seĝon.

En tiu stacio nur sep vagonaroj haltis ĉiutage. Li estis malgaja, ĉar pasaĝeroj malmultiĝis pli kaj pli ĉiujare.

Li malfermis tre malnovan kajeron sur la tablo. Ĝi estis la stacia taglibro, kiun antaŭ ĉirkaŭ kvindek jaroj tiama estro de ĉi tiu stacio uzis.

La kajero trovita en fundo de la ŝranko montris, ke oni transportis de la stacio multajn ĉevalojn per kargovagonaroj.

Skribo estis tiel, kiel ekzemple “La 16-an de oktobro, 1943. Nuba. 23 ĉevaloj. Ĉar lastatempe mankas taŭgaj ĉevaloj, oni sendas ankaŭ jam ne junajn.”

La taglibro estis skribita ekde la printempo de 1941. Tiam Japanio militis. Milito bezonis multajn ĉevalojn por rajdado de soldatoj kaj porti pezaĵojn. Oni kolektis la ĉevalojn el pastejoj kaj kamparanoj, kaj sendis ilin al fora fronto trans la maro.

“Ho, oni transportis ĉirkaŭ mil cevalojn al fronto de ĉi tiu stacio, ĝis la fino de la milito!”

Sumo de la nombro de la ĉevaloj sur la taglibro ja atingis ĝis 947! Kelkajn el ili la staciestro sendis de sia domo, kiam li estis lernejano.

Li naskiĝis en vilaĝo, ne tre malproksima de la urbo kun ĉi malgranda stacidomo. En la vilaĝo, bredi ĉevalojn estis delonge prespere, kaj ankaŭ lia familio kutime havis kvin-ses ĉevalojn.

En ŝtorma nokto de printempo, kiam li estis en kvara lernoĵaro, unu ĉevalido naskiĝis. Ĝi estis blanketa, kian oni nomas ruana. Oni donis al ĝi nomon "Hakusan".

"Akira, volu varti la ĉevalidon!"

Kiam ĝi kreskis iom, la patro diris al li. Li ĝoje prizorgis ĝin ĉiutage. Li donis furaĝon, frotadis ĝian korpon per pajlaĵo, kaj ĉirkaŭkuris kune kun li. Hakusan estis petolema ĉevalido, kaj ĝi tre amis kuri.

La vilaĝo havis provincan ĉevalkonkurson en aŭtuna festo ĉiujare. En la ĉevalkonkurso okazis konkurso de ĉevalidoj rajdataj de lerneĵanoj. En aŭtuno de la sama jaro li partoprenis en la konkurso rajdante sur Hakusan. La animo de li kaj Hakusan uniĝis. Fendante venton, li rapidege rajdis sur Hakusan. Fine ili venkis en la konkurso. Tio estas neforgesebla memoro ankoraŭ nun.

Sed post ne longe de la komenco en la kvina lernoĵaro, en majo de 1945 oni decidis sendi Hakusan'on, al la fronto. Oni plene ŝarĝis vagonojn per Hakusan kun ventro-zono kaj aliaj ĉevaloj por transporti ilin malproksimen de la malgranda stacio.

Li venis tien kun sia patro por forvidi Hakusan'on, kaj plorante svingis la brakojn eĉ post ol la vagonaro jam foriĝis. Hakusan estis ankoraŭ juna ĉevalido.

"Akira, paciencu! Certe ĝi revenos post la milito." La patro kuraĝigis lin, sed lia voĉo tremis.

Tri monatojn poste, la milito finiĝis. Baldaŭ tiuj revenis hejmen kelkaj post kelkaj, kiuj iris al la fronto kiel soldato. La knabo atendadis baldaŭan revenon de Hakusan, ĉiutage murmurante al si; "Certe hodiaŭ ĝi revenos!"

Kaj li ofte iris al la stacio, tamen ne revenis Hakusan. Ne nur ĝi – neniu revenis el ĉirkaŭ mil ĉevaloj, kiuj iris al la fronto de ĉi tiu stacio.

Ne nur ĉevaloj. Ankaŭ troviĝis vilaĝanoj, kiuj ne revenis el la fronto.

La staciestro senbrue fermis la kajeron.

"Nun, mi memorigu al mi la ĉevalojn, kiuj estis senditaj al la fronto kaj neniam revenis hejmlokon. Ni konstruu monumenton en la placo de stacio, esperante ke homoj kaj ĉevaloj neniel iros al fronto ankoraŭfoje."

Iun tagon, li diris tion al vilaĝ-oficistoj, kaj al maljunuloj, kiuj tiam sendis ĉevalojn kaj sentis sin maldolcaj.

"Ĉar ni nun vivas en paco, mi ne havas intereson pri tia malnova afero." Iu diris al li.

Tamen plimultiĝis, kiuj instigis lin, "Tio gravas. Dum la milito, kvankam oni mobilizis kelkdek mil ĉevalojn al la fronto el la tuta lando, tamen nun forgesis ilin. Nepre ni konstruu la monumenton!"

luj instruistoj sciigis lernantojn pri la vortoj de la staciestro.

Troviĝis homoj, kiuj en sia urbo aŭ urbeto kolektis monon por la monumento, kaj alportis al la stacio dirante, "Bonvole uzu ĉi tiun monon."

Unu jaro pasis post la alvoko de la staciestro. En iu tago, kiam ruĝaj libeloj denove komencis flugi facile, multaj homoj amasiĝis ĉe la malgranda stacio en la suburbo. Inaŭguro de la monumento estis komenconta en la stacia placo.

Parada muzikistaro de lernejoj eniris la placon. La spektantoj aplaŭdis. Neniam antaŭe tiom da homoj kunvenis ĉe ĉi tiu malgranda stacidomo.

"Do, nun ni malfermu la inaŭguron. Reprezentantoj de maljunuloj kaj lernejoj en la vilaĝo inaŭguros la monumenton." La staciestro salutis. Lia koro pleniĝis de emocio.

Ili aplaŭdegis kaj ĝojkriis. Kiam la reprezentantoj senigis vualon, la monumento de granda natura ŝtono aperis.

Sur la monumento troviĝis vortoj "Pacon al 947 ĉevaloj senditaj al la fronto de ĉi tiu stacio" kun gravurita ĉevalo, kiu estis kuranta flirtigante la kolharojn.

La staciestro momente supren rigardis al la hela ĉielo en aŭtuno. Sur la ĉielo blanka nubo svebis penikante figuron de ĉevalo.

"Hakusan revenis kun plezuro al hejmloka ĉielo pro hodiaŭa afero. Volu tie ludi kontente." Li murmuris al ĝi, dume rigardadis supren.

♪♪♪

エスペラントこぼれ話

「エスペラントの歌」

エスペラントの「応援者」の話で、ふと気がついたが、歌手が時々エスペラントで歌ったり、歌の中に取り入れたりしますね。

「世界に、広く訴える」と考えるのか、変わった、新しい趣向を求めるのか。古くは Pete Seeger, Bob Dylan, 意外だったのは奥村チヨが ESPERANTO TOKIO という曲をデュエットで歌って「希望する人の意味」と説明していたのは、94年9月26日のNHKTV, 二人のビッグ・ショウでした。

realigi (レアリーギ) というエスペラントのタイトルの桑島法子キャラクターソングアルバムが7/26に発売されました。

NEW RELEASE (KONAMI) (http://www.konami.co.jp/kme/l_info/new.html) realigi のコメントでは「実現する、叶う」という意味のエスペラント語。と説明がありジャケットの写真も掲載されています。

(6/29に更新された内容です。日数が経過すると内容が入れ替わりますので注意) ラジオ番組『CLUB db』番組REPORT

<http://www3.nsknet.or.jp/~ry3/db20000624.html>

ここは6月24日に放送された番組のテープ起こしをした内容のようです。

realigi の話題では彼女は宮沢賢治が大好きで賢治がエスペラント語を勉強するために上京したことや辞書のことなどを放送で話したらしい。

注：桑島法子(くわしまほうこ) 本名同じ 声優 出身地：岩手県

ちょっと前のことになりますが、マイケルジャクソンのCD"歴史"の宣伝ビデオを出したとき(日本発売は95年6月)その中でエスペラントを使いました。ビデオの中で子供達がエスペラントで "Mi amas vin, Michael Jackson." "好きだよ、マイケルジャクソン"とか、「音楽による"癒し"のために」とか、バックグラウンドで歌い、また、マイケル・ジャクソンの衣装(ユニフォーム)には緑の星(エスペラントのシンボル)があしらってありました。(北極星)

*VOJO SENLIMA: N-ro 147 Aprilo 2000; 熊本エスペラント会: B5 X8 頁、日本文。「熊本国際交流2000」に参加、チラシを配り本を売った時の写真が1頁にある。「栗栖さんからの手紙」は中国の S-ro 黄銀宝(KS で会った人があると思う、エスペラントで種を集めてスイカの品改良に成功した) などについて、エスペラントが役立っていることを指摘。

*La Vulkano: N-ro 134, 2000, Somero.: LA ORGANO DE HUKUOKA ESPERANTO-SOCIETO B5 X 8頁中E. 文2頁半。8月5日 NHKFM放送の「クロアチア物語」への原作者 Spomenka Stimec のメッセージ全文が E-日対訳で出ている。

*Novajoj Tamtamas: n-ro 161 julio /2000, A4 X 4頁、全文エスペラント, JER(= Jokohama Esperanto-Rondo)発行。Letero el Nepalo は今年のエベレスト登山とシェルパの話。

*La Tamtamo: 第 315号(2000年7月号, JER), A4 X 4頁、日本文。「Zsuzsanna 旋風吹き荒れる!!」; 招待の可否、受入先も決まらぬうちに来襲、東京、横浜、千葉などのエスペランティストの間を渡り歩き2日間滞在して去ったハンガリーの数学者(-ino)の始末記。なお波乱の続報がある模様。

*VOJO SENLIMA: N-ro 148 Aŭgusto 2000; 熊本エスペラント会: B5 X10頁、日本文。トップに韓国エスペラント大会の写真。参加者105人のうち日本から30人とのこと。

*北海道年鑑・団体編」のデータ(HEL) 依頼。(道新より)。昨年と同じとして回答済み。

*SFERILO: 変形A4版1枚2頁。ESP. 英文混在。サンフランシスコ(北カリフォルニア) 地域エスペラント組織SFERO の機関紙、9月例会予告号。伝統のサンフランシスコ夏期講座、来年から場所が変わりそう。97年の第61回北海道大会に参加し協力してくれた Miko Sloper、今度ニューメキシコの大学に入るので ĝisrevida festeno. 98年の道大会に来た Ed Willigerは

Stanfordで講座を担当。

*センター通信: 2000年8月18日名古屋エスペラントセンター発行 N-ro 219 B5X14頁の内E文約3頁。アジアエスペラント運動(竹内義一)(E-日対訳)は東海大会での講演内容。

*受講生通信 第72号 2000-09-01: 沼津エスペラント会通信講座: B5X 10頁のうちE文2頁。催し物記事に第64回北海道エスペラント大会。

*Mejlŝtono 2000/Sept., n-ro 161, 仙台E会: B5X8頁の内E文3頁。東北大会、世界大会、モンゴル大草原の集会などの記事。

発送は10月だったので、9月の東北大会で再選されたばかりの佐藤勝一連盟会長の訃報(10月3日急逝)がはさまれていた。

*La Tamtamo: 第 316号(2000年9月号, JER), A4 X 4頁、日本文。「Raymond Schwartzの世界」は"Kiel akvo de l'rivero" の読書会。舞台は1913~1946年のフランス、480頁の大作。

*Novajoj Tamtamas: n-ro 162 septembro 2000 A4 X 4頁、全文エスペラント, JER.

香港 I J K とサンフランシスコ講座のくわしい報告。Zsuzsanna の日本訪問記も連載開始。

*Eskalo 第87号、2000年9月、川崎エスペラント会、B5 X 6頁中E. 文 1頁弱。北川郁子さんの香港 I J K 報告に「北海道の川合由香さんたちと広東料理を楽しみ、夜は一」とある。

*SFERILO: 変形A4版1枚2頁。ESP. 英文混在。10月例会予告、9月例会報告。日本から帰国した Joel Brozovsky さっそく出席している。

*PONTETO: Septembro 2000 N-ro 183: 関東エスペラント連盟: B5X16頁の内エスペラント文3頁。秋の合宿(八ヶ岳)とネパールの Narendra さん来訪の記事。

*NOVA VOJO: 2000. 9 (N-ro 355), 大本エスペラント普及会, A5 X32頁、内E文4頁。UK関係記事は15頁にわたっている。

*La Movado N-ro 595 sep. 2000, B5版16頁の内E文は約2頁。関西大会でのシンポジウム

「地球時代のコミュニケーションー民際交流の言葉を考えるー」はなかなか充実した内容。

北海道大会の予告記事あり。

*jarlibro 2000;Kansaja Ligo de Esperanto-Grupoj:(KLEG活動年鑑2000),B5 X 37頁。

KLEGの歴史、入会案内、2000年度計画、前年の実績、事務所利用手引き、加盟団体一覧、紹介から事務所案内図まで。よくできてます!

*センター通信:2000年9月25日名古屋エスペラントセンター発行 N-ro219 B5X12頁の内E文3頁は「レザさんからのお便り」、サンフランシスコ講座と八ヶ岳でのNur-Esperanta kunvivado について。

*LA SUNO:N-ro 72, 2000. 9.30,山梨エスペラント会、B5 X18頁のうちエスペラント文8頁。

*Hokkaidō Rōmazi Kenkyū No.106 (復刊80)北海道ローマ字研究会発行、Hs.12n.10gt.01nt.読者の便りの中に MUKAI Toyoaki (Tōkyō-to)の名があった。80年代まで日高に住み、HEL-ano だった人。

受贈資料に Heroldo de HEL N-ro 85.次の批評文つき。「20頁の大部の内容は、連盟の存在を揺るがしかねない重大な問題も含んでいて、同じように理想主義的な運動にかかわっている我々にも他山の石とすべきものがあるとー」

これを書いた現研究会長もかってSES-HEL に籍をおいていた samideanoだった。

*NOVA VOJO:2000.10 (N-ro 356),大本エスペラント普及会、A5 X28頁、内E文5頁。

*La Tamtamo: 第317号(2000年10月号,JER),A4 X 4頁、日本文。読書会紹介は "Falantaj Muroj". この内容について作者 Trevor Steele が Adelajda UK(1997)で、ja verve kaj konvinke parolis --を思い出す。

*Novajoj Tamtamas:n-ro 163 oktobro 2000,A4 X 4頁、全文エスペラント,JER. 世界大会と Postkongreso (エジプト),サンフランシスコ講座での試験の記事など。

*La Movado N-ro 596 okt. 2000, B5版16頁の内世界大会関係3頁、E文は約2頁。

TTT-paĝo de HEL

北海道エスペラント連盟 インターネット ホームページ

<http://www2u.biglobe.ne.jp/~HEL/index.htm>

電子メールのアドレスはこちら→hel@mud.biglobe.ne.jp

Registro de renovigoj

27 2000.10.21 La artikoloj en la aina-lingva ĵurnalo "AinuTimes"

[Nova-kodoj de la japanaj karakteroj pri aina-lingvo]

[La monto Us-nupuri (Usu-zan) erupcias]

更新履歴 日本語版

48 2000.9.15 第64回北海道エスペラント大会の報告

Nombro de vizitintoj al la hejmpaĝo de HEL アクセス件数

Japanlingva 日本語版 5603

Esperanta エスペラント版 2070

2月4日 創刊準備号

2月11日 創刊号 創刊のことば

エスペラントの世界 No. 1 : エスペラントとは?

2月25日 第2号 No. 2 : エスペラントによる国際文通

3月10日 第3号 No. 3 : パスポルタ・セルボ

3月24日 第4号 No. 4 : デレギータ・レート

3月31日 臨時増刊号

4月14日 第5号 No. 5 : 世界エスペラント大会

4月28日 臨時増刊号 オジンがエスペラントを始めたわけ

5月12日 第6号 No. 6 : 日本エスペラント大会

5月26日 第7号 No. 7 : ザメンホフってどんな人?

6月9日 第8号 No. 8 : 日韓中青年セミナー

6月10日 号外 (読者からのおたより)

6月23日 第9号 二風谷5月合宿記

入門講座 No. 1 : アルファベート

7月14日 第10号 入門講座 No. 2 : 動詞

こぼれ話 No. 1 : えっ、あの人がエスペランチスト?

7月28日 第11号 入門講座 No. 3 : 名詞 形容詞 派生副詞

こぼれ話 No. 2 : 字上符って何とかならないの?

8月11日 第12号 入門講座 No. 4 : 人称代名詞 動詞の目的語 補語

こぼれ話 No. 3 : エスペラントは何語に似ている?

8月25日 第13号 入門講座 No. 5 : 語順 人称代名詞

こぼれ話 No. 4 : y やw はなぜ使われない?

9月8日 臨時のお知らせ号 (発行日変更 「こぼれ話」の補足)

9月15日 第14号 北海道大会速報

9月22日 号外 (読者からのおたより)

9月29日 第15号 入門講座 No. 6 : 数詞

こぼれ話 No. 5 : エスペラントの歌

10月13日 第16号 入門講座 No. 7 : 会話 (あいさつ)

10月27日 第17号 入門講座 No. 9 : 疑問文 疑問詞

10月28日 臨時増刊号 追加補充

11月10日 第18号 入門講座 No. 10 : 疑問詞 (2)

11月14日 増刊 (訂正)

11月24日 第19号 入門講座 No. 11 : 疑問詞 (3)

こぼれ話 No. 6 : エスペラントの賛歌

HEL 委員会について仮報告

第2回 HEL 委員会は10月28日(土)に集まって次の議題について報告や話し合いがおこなわれました。

- ① 第64回道大会(小樽)報告
- ② 第65回道大会(札幌)について
- ③ 新春講習会について内容・時期等の検討
- ④ 第2回極東ロシア訪問団; 参加人員、期間、費用等の検討
- ⑤ カンパ要請の必要性の検討
- ⑥ メールマガジンの発行状況
- ⑦ インターネットの現状
- ⑧ 機関誌編集について
- ⑨ その他

詳しくは次号で正式に報告します。(樺山裕介)

El la redaktejo 編集室から

* わらび座の公演「菜の花の沖」を観ました。原作は司馬遼太郎。主人公の高田屋嘉兵衛は、故郷の淡路島でいじめられ、庄屋の娘と兵庫へかけおちして、裸一貫から北前船を操る大商人に上り詰めた男の中の男。松前藩から漁場を請け負ってアイヌ民族を酷使した近江商人と違い、アイヌ民族の人々相手にもひとりひとり、正当な取り引きをした人物です。この男が当時の日露の摩擦に巻き込まれ、幕府のもとに捕囚となったロシア海軍士官ゴローニンの代りに、カムチャッカに人質として連れていかれます。そこで体を張って、下手したら戦争になっていたところを、ゴローニンの部下、リコルド少佐と対立しながらも互いの人物を認め合い、協力して奔走し、双方の誤解を解いていくところがクライマックスで、劇でもそこだけを舞台にしてみました。私は高校生の頃に原作を読んで感動しました。劇の迫力にも感動しました。

* さて、今年の道大会のテーマは「国境」でした。その作用は強力です。地図を見てください。本州を中心にした日本地図ではなく、北海道を中心とした地図を考えてください。東西南北をぐるぐる回して。(北が上という固定観念も問題です。)いかに、津軽海峡の向こうからの情報が圧倒的に私たちを覆っていることか。宗谷海峡の向こうからと、根室海峡の向こうにも人も自然も事件もあるのに。印刷物も電波もすべて本州、それも関東地方の局所から送られてくる。身も心も内地と一体化し、西、北、東は空白になる。これは不自然です。

* まず足元をみたらうでの、本州島(シサムモシリ)以南へと同様のサハリンや大陸沿海への視野は北海道住民ならば、ごく当然のことです。サハリンに住む人々は、ロシア、ウクライナ、日本、朝鮮=韓国、ニヒ、ウイグル、アイヌ、ヤクート、ポーランド...と多彩。民族共生を考える良い例ともなるでしょう。南樺太をロシアと日本の両方の主権地とした時代もあり、これは、国境絶対主義がはじめからあったものではなく、あいまいであったことの証拠でしょう。*6ページの前フロンティアタイムズの見出しに「心の国境」の存在を感じた」とありますが、その場にいた私からすれば、これは強引なこじつけで、ロシア人、日本人双方から炙り出そうと聞いてみても、「銭湯事件」以外に具体例が無く、聞かれたほうが当惑していました。むしろ、浮き彫りになってきたのは、先住民対移住民の関係(migrantoj kontraŭ praloĝantoj)の構図です。移住民どうしは、ちがう民族でも通婚し、心の境など無いが、先住民とはしなかったとのこと。移住民国家がふたつある北米も似ているでしょう。そこで、どうしても考えざるを得なかったのが、今年の世界大会の行なわれたイスラエルのことです。移住民(ユダヤ人; 先住民だと主張しているが、それを認めた上でも、この単語の範疇に入るでしょう) どうしは多様性に満ちていてそれを誇示していても、イスラエル建国以前から住んでいた人たちは存在してはいけなかった存在だったのです。大会の参加者に聞いてみると、アラブもユダヤも仲良くしていたとのこと。しかし、世界大会後の事実は、凄惨です。オーストラリアの世界大会ではアボリジニのことが取り上げてありました。イスラエルでの世界大会でアラブ系イスラエル市民、占領地のパレスチナ市民、そして難民のことを打ち出さなかったのは、エスペラント界の理想にタブーを設けた苦さを感じます。アラブ系の人と協同のキブツの訪問が Revuo Orienta に載っていたのが救いでした。

* 「ウレシパモシリ」というアイヌ語があります。青木愛子フチのとなえた言葉ですが、「共に育み合う地」という意味です。エスペラントの理想と同じ波長です。

* 連盟行事に講師として招いたことがある、岩手県の佐藤勝一さんが亡くなりました。昨年日本大会で初めてお目にかかりましたが、イーハトーヴォの先生らしい温厚なオーラのあった人でした。ご冥福をお祈りいたします。

樺山 裕介



geamikoj de For-Orienta Rusio ĉe EKH (nia kongreso)

gesinjoroj German DUDĈENKO, Miroslava SAVĈENKO kaj Guennadi ĈLEPTĈENKO

Novaĵetoj

***苫小牧エスベラント会**のザメンホフ祭は 12 月 8 日 (金) 18:30 からアイビープラザで始めて、後に場所を移して行います。連絡先は星田淳さん (電話・ファクス 0144-74-2539 電子メール mcm63639@biglobe.ne.jp)

***札幌エスベラント会**のザメンホフ祭は 12 月 9 日 (土) 13:00 から、かでの 2-7 にて。バザーをしますので、売る物を何か持って来てください。連絡先は馬場恵美子さん (電話・ファクス 011-761-8060)

*新しいロンドを佐藤英治さんと松野元さんが創りました。政治や思想を含めた自由な討論の場のロンドです。ロンドの名前は未定。

*HEL の新年講習会は 2001 年 1 月 20 日 (土) から 21 日 (日) に札幌市北区ロンデタージョでおこないます。内容は「①メールマガジンを教材にした入門講習会②中級講習③ JET 学力検定試験」を予定しています。詳しいことは追ってお知らせします。

Heroldo de HEL

第 86 号 (2000. 11. 25)

北海道エスベラント連盟機関誌

編集部 〒075-0041

芦別市本町 1065-64-B-101

樺山 裕介方

tel/faks 01242-2-1305

電子メール kabaty@fa3.so-net.ne.jp

郵便振替口座

02700-6-17075

北海道エスベラント連盟

正会員 3000 円 家族会員 1000 円

青年会員(25 歳以下) 1500 円

購読会員 2000 円